

書評：中山誠二. 2020. ものが語る歴史 40 マメと縄文人. B5版, 191 pp. ISBN978-4-88621-844-5. 同成社, 東京. 3700円+税.

本書は著者の縄文マメ研究の集大成である。「集大成」と書くと、いかにも著者が長年マメの研究を続けてきたように思われるかもしれない。しかし、第1章にあるように、「縄文のダイズ研究元年」は、小畑弘己氏らが九州で縄文時代後期のダイズ圧痕を発見し、著者が酒呑場遺跡で縄文時代中期のダイズ圧痕を発見した2007年である。つまり著者は、このたったの13年間で縄文時代のマメ研究をここまで推進してきた。その13年間の著者による縄文マメ研究への取り組みが本書には込められている。

本書は、これまでに著者が発表してきた論文に加え、新たに書き下ろしたものを加えた、全7章で構成されている。第1章「縄文人が利用したマメ」では、これまでの縄文時代の遺跡から出土したマメについて、その評価の変遷が簡潔に整理されており、いかにして縄文時代のマメが注目されるようになったのかが、わかりやすく紹介されている。特に、かつて鳥浜貝塚でインド原産のリョクトウが出土したとされていたが、これが誤同定で、現在ではヤブツルアズキと再認識されるようになった経緯や、縄文のダイズが炭化種子ではなく圧痕で認識されるようになった経緯が紹介されており大変興味深い。現在でも、縄文時代の炭化種子を分析していると、ダイズよりもアズキの方が圧倒的に多く出土する傾向がある。炭化種子と圧痕では、種によって出土傾向に違いがあるので、当時の炭化種子の分析だけではダイズを見つけることが難しかったのかもしれない。縄文時代のダイズ利用が認識されたのは、まさに圧痕分析のおかげである。

第2章「マメの同定法」では、本書で主役を演じる「レプリカ法」が紹介される。そして、アズキ、ダイズ、リョクトウ、ササゲ、インゲンなど主要なマメの形態分類に関する詳細な解説が、小畑弘己氏による先行研究の紹介とともに行われている。

第3章「縄文時代のアズキ」では、まず、ササゲ属アズキ亜属に属する複数種の形態的特徴の記載と詳細なSEM画像が示されており、資料的価値が非常に高い。著者が自らジーンバンクで収集した世界中の現生標本を丹念に観察・検討した結果であり、考古学出身の著者がよくぞここまで勉強したと唸らせる。続いて、遺跡から出土した縄文アズキの出土状況が示されている。縄文時代の時期ごとに示されたアズキとダイズの分布図は、縄文時代の前期～中期に中央高地で利用が多く、後期以降に全国に広がる様子が理解しやすくなっている。

第4章は「縄文時代のダイズ」である。アズキが28ページであるのに対し、ダイズには46ページを割いており、

著者のダイズへの思いが強いことが分かる。著者が縄文のマメ研究にどっぷり浸かるきっかけとなった縄文時代中期ダイズの発見の経緯からスタートし、圧痕を中心とした縄文ダイズの出土例が紹介されている。ここでもアズキ同様、比較のためにジーンバンクから取り寄せた現在の様々なダイズ品種のSEM画像と形態記載があり、大変資料的価値が高い。著者はこの比較の結果、縄文時代中期の縄文ダイズが野生種ツルマメと現在の栽培ダイズの間型の形態を示す栽培ダイズだったことを示している。

第5章「マメ科植物の大型化と栽培化」では、縄文時代のダイズとアズキが野生種であるか、それとも栽培種であるか、改めて議論されている。植物のドメスティケーションによる一般的な形質変化についての解説の後、これまでのダイズの起源地に関する学説、中国と朝鮮半島における植物考古学のデータ、そして遺伝学から見たダイズの起源が紹介され、良質なレビューとなっている。そしていよいよ、ダイズとアズキの種子の大型化について時期的な変遷が示され、縄文時代中期に大型化する様子が丁寧に解説されている。また、勝坂遺跡と越後山遺跡から出土したダイズ属種子圧痕の表面から、野生種ツルマメに特有の膜状組織を発見した経緯が紹介されている。これは、もともと野生種に特有な構造であるが、越後山遺跡の大型の縄文ダイズにもこの膜状組織が見られることから、著者は、これが野生種と栽培種の間型の属性を示すものとして評価している。この膜状組織は種子の撥水機構と関係があり、つまり休眠性と関連するので、休眠性の欠如に先行して種子の大型化が起きていた可能性があり、大変興味深い指摘である。

第6章「マメの栽培利用と調理法」では、縄文時代のマメがどのように栽培されたのか、著者の仮説が披露される。著者は、「縄文人が集落周辺の二次植生帯の一定空間において多種類の植物を管理・栽培したと考え、そのあり方は園耕・園芸という言葉がもつともふさわしいのではないか」と現時点での考えを披露している。ただし、栽培だけでなく管理や採集だけでもドメスティケーションが起きた可能性も残されていることを示したうえで、「縄文農耕論の是非は今、栽培植物の出現プロセスの解明や遺伝学をも巻き込んだ次なるステージに移ろうとしているのである」と今後のさらなる研究が必要であることを強調している。評者もこの問題には大変興味があり、具体的に縄文人がどのような行動によりマメの集団を維持・増殖していたのかを知ることが今後の課題になると考えている。

次に、マメの利用と気候変動との関係が示され、さらにマメが主食だったかどうか議論されている。著者は、中

央高地における佐野隆氏の研究を紹介しながら、マメは堅果類などとの相互補完的な食料であったとし、次章では、「縄文時代のダイズ属やアズキ亜属種子の検出状況をみる限り、2つの豆類は木の実などの堅果類の補完的な役割とするよりは、むしろそれらの植物とともに主要植物群の一角を構成していたと捉える方が自然であろう」として、縄文時代におけるマメは主食とは言い切れないものの、重要な食料源の一つだったと評価している。マメの調理法については、縄文土器の底部内面に残る縄文アズキのおこげが紹介され、煮豆などにして食べられた可能性が示されている。また、ツルマメの発酵実験が紹介され、ススキの枯草菌でツルマメの納豆づくりが可能なが示されており、発酵させて食べていた可能性も紹介されていて興味深い。

第7章「マメと縄文人」では、マメの食糧としての役割に加えて、マメをとりまく精神世界として、マメの大量圧痕土器やマメの入った土鈴が紹介され、マメの呪術的な役割についても言及されている。最後に「縄文マメ学の未来」では、さらなる学際的な研究の必要性が訴えられ、縄文マメ学が持続型社会の維持、環境変動や食糧危機への対応

など現代社会における課題解決の糸口を見つけるきっかけになることが強調されている。

以上、ざっと本書の内容を紹介したが、このように、本書は、著者が、縄文ダイズの発見後、自ら植物学や遺伝学の勉強をしながら縄文のマメ研究に邁進し、ツルマメの発酵実験を行うようになるまで、縄文マメ学を醸成していくまでの挑戦や葛藤、考え方の変遷を読み取ることができる本となっている。本書の最も優れている点は、考古学出身の著者が自ら植物学を勉強し、縄文マメ研究を牽引するまでになった経緯とその地道な記載研究が詳細に示されていることである。これまでのように考古学者と植物学者が単に共同研究を行うだけでは、人と植物の関係史を理解することはできない。人と植物の関係史に興味を持ったものが、自ら両方の分野を勉強することで、はじめてその理解に近づけることを本書は示している。特に、これから植物考古学者（考古植物学者）になろうとする若者にはぜひ読んでもらいたいし、植生史研究に携わるものにも大変刺激になる本だと思う。ぜひ手に取って読んでいただきたい。

(那須浩郎)